

モビリティ・デザインの実践～実社会での協働を通じたオープン型専門人材の育成～

有吉 亮 横浜国立大学大学院 都市イノベーション研究院 都市イノベーション部門
特任准教授

御紹介いただきました横浜国立大学の特任教員の有吉でございます。

本日は、先ほど学生の話が少し出ましたけれども、人材育成の観点から、この「総合知的」な発想で社会に対する貢献活動、これを学生と教員が一緒にやっている中での事例紹介をさせていただきます、皆さんの「総合知」の議論のベースになればと思っております。

本日お話しする内容ですけれども、まず我々が取り組んでおります大学の教育科目としての実践的な学びの話、その幾つかの事例の御紹介、そしてその活動から見えてきた「総合知的」な人材育成の可能性と課題というところに触れたいと思います。

まず、今、大学で取り組ませていただいておりますが、教育プログラムとしての「地域交流科目」というのがございまして、この科目と申しますのは、教育学部、経済学部、経営学部、理工学部、都市科学部が連携しまして、異なる領域を横断して実践を学ぶというプログラムでございます。もちろん座学のような科目もベースとしてあるのですが、一番上の実践科目というところに地域課題実習という科目が設定されてございまして、これはまさに実際の地域の課題に対して学生が解決方法を提案し、それを社会実装までもっていくという、その一連のプロセスを様々なステークホルダーと一緒に協働しながら、教員も含めて学んでいくことで単位が得られるというものでございます。

こちらの実習科目に関しましては、実は多様にメニューがございまして、25 個ぐらいテーマがございまして、学生はその中から好きなもの一つを選んで履修をするのですが、私の専門が都市交通ですので、このモビリティ・デザインを担当しておりますけれども、23 名ぐらいの、多様な学部にも属する大学 1 年生から 4 年生までが、「移動しやすいまちの実現」に向けて、様々なステークホルダーと協働をしているという状況です。右下にパイチャートがありまして、学生の所属の内訳が示されています。都市科学部で土木工学を学んでいる学生が多いのですが、経営やその他のいろいろな学生が集まって、一つの活動に取り組んでいるというのが特徴でございます。

ちなみにモビリティ・デザインという概念ですが、これは、いわゆるモビリティという乗り物そのもののことを指すわけではなく、人の移動のしやすさというコンセプト的な

話として捉えています。モビリティをデザインするということは、要するに人々が移動しやすいまちをつくるということです、それに向かって皆さんで協働して取り組むということでございます。もともとの発想は、今、東京大学の特任教授をしていらっしゃる中村文彦先生が提唱された概念でございまして、これを我々が受け継ぐ形でやらせていただいております。

この体制ですが、学生の実習課題ですので、先ほどのような先端的な研究の話はあまり出てきませんが、実際の現場の生々しい課題に対して幾つか班を設定しまして、課題解決に取り組む学生チームをつくります。それぞれのチームごとに班長を決めまして、専門分野の異なる教授陣が集まってマネジメントしているわけですが、その間をつなぐ役として、少し専門性を持った大学院生等をリエゾンとして雇用して間をつないでいただいて、外はそれぞれの班にカウンターパートがいて、企業だったり自治体だったりという方々と一緒にプロジェクトを進めております。

こちらはプロジェクトの進め方ということで、様々な会議体をうまくミックスしながら、対外的にもいろいろと発信をしながら進めております。

このモビリティ・デザインが目指すものですが、改めて考えてみますと、一つは人材の育成というのがございます。特に「総合知」というものを最初は意識していなかったのですが、こういう生の課題に対していろいろな人が集まって、解決策を社会実装までもっていくということを真剣に考えました時に、やはり必要なのは高度な専門性を持ちつつも、外に開いた考え方を持つ人材をいかに育成し、それらをつなげて、より大きな「知」の力をつくっていくところかなと感じています。それをもって地域社会の実際の課題を解く、ただ提案するだけではなく、それが事業として社会実装できるような形までしっかり付き合うということによって、関わる全ての人たちと信頼関係を醸成し、それを基盤に地域を強くしていくというところを目指している活動だなと、改めて整理をしています。

その中で幾つか具体の成果を御報告いたします。

まず1番目として、「MaaS でまちづくりチーム」という班がございまして、こちらは横浜の都心部がターゲットになっていますけれども、横浜都心部を訪れてくれた人たちに楽しんでもらうということ、要するに、観光しに来てくれた方々への Well-being の向上に移動支援のアプリケーションがどのような貢献ができるかというところから始まりまして、MaaS アプリの「my route」という、もともとはトヨタ自動車ローンチしたサービス、こちらの神奈川県内への展開を自動車販売店連合であるトヨタ系のチームが担っています

けれども、そことコラボすることで新しいサービスを生み出していくということです。

この「my route」のアプリの課題としましては、今、アプリ自体は結構使われていますが、通勤での利用がメインで、当初想定していたような、多様な世代がまちを楽しむという目的ではまだ十分に使われていないということで、そこに学生がユーザーとしてのイメージを持って一緒に入ること、若い世代がまちを楽しむためのアプリに進化させていく。そのために必要なものをしっかり大学の学生が主体的に動いてマーケティング等をして、ステークホルダーとの会話の中で、幾つかの方針というのを提案しています。

この中から実現可能性が高そうな2つの案を実際に選定しまして、それを実際にプロジェクトに載せていくということでやった結果の一つが「袴で横浜思い出づくり」という新しいサービスのローンチです。こちら、もともとの発想は卒業シーズンで、袴で横浜の、要は「映える（ばえる）」ところを回って、記念写真を残したり、地域の飲食店で食事したりということで思い出を残すということと、そのために必要な移動に関するサービスを、先ほどの移動支援アプリの「my route」と連携して新しいサービスにしていくことで、若い人にもっと横浜を楽しんでもらうためのコンテンツを増やすという発想でやっているものです。こちらの写真に写っている女子学生の様子、これはうちの学生ですが、実際にPoCをやって企画の充実に貢献をしまして、右下にありますように、実際にこのサービスがローンチされた時のイメージの写真の中にその様子が使われているといった形で、これは一つ、モノになりそうな事例でございます。

時間がありませんのであと1つぐらいですけれども、他にもいろいろしている中で、もう一つが、今度はキャンパスの中に目を向けた「みらいの地図チーム」というのがございます。これは、いわゆるキャンパスマップをデジタル化して、人をワクワクさせるようなキャンパスマップをつくるという発想でやっているもので、こちらのカウンターパートは大学発ベンチャーの「LocaliST」という株式会社、これは実は私が代表を務めている会社ですが、大学発ベンチャーと学生が一緒になって、大学のキャンパスマップを、より人をワクワクさせるようなものに発展させていこうという発想のものでございます。名前は「Y's navi（ワイズナビ）」とつけたのですが、今の紙のキャンパスマップの課題としては、最初もらったときに眺めるぐらいで、あとはもう使わなくなってしまうということがありますので、そうではなく、学生・教職員が大学生活を送る上で本当に必要な情報を動的に出していく。そのためにデジタルの知識が必要になりますし、アプリケーションの開発等が必要になるということで、そういうことができる人たちがうまく集まって、一

つの目的のために動いているということです。

幾つか機能を御紹介しますが、ベースは大学の中の経路検索機能というのが基本機能としてありまして、これはよくある話ですが、大学の講義棟等の建物レベルでの細かい、歩行者専用の小道まで含めたルートのご案内等ができる機能がまず実装できました。

それからこちらはオープンデータ連携になりますが、横浜国立大学というのは残念ながら駅から離れていまして、バスで行かないと行きづらいようなところに立地しています。ということでバスの情報が非常に大事なわけですが、大学構内や周辺を運行する、いろいろな会社が運行しているバスの情報を初めて一つの地図上に統合して、そのリアルタイムの運行データと GTFS のリアルタイムデータを連携することで一つのマップ上に表現することが実現できました。これによっていろいろなアプリや Web で検索することがなく、必要な情報がすぐに得られるということになっています。

このような形で、ほかにも、学生と一緒にまちに出て地域の方々と一緒に活動することで、様々な社会課題に対して対応しつつ学んでいくということをやっております。

こちら、最後の課題のところは、この後の総合の議論のところでもう一度参照していただくようなイメージでつくっていますので、ここでの説明は割愛させていただきます。

【質疑】

(上山) ありがとうございます。やはりここでも実践型の活動と大学の話だと思いますけれども、こういう活動はある意味では大学の学生さんも含めたオープン化といえますか、大学を外に開いていくという活動だとは思いますが。そうしますと、一つお聞きしたいのは、なぜこれを大学でやるべきだとお考えになっているのか、確かに学生さんがたくさんいますのでやりやすいといえますか、むしろ学生さんがキーワードになってくるということがありますけれども、こういうことをやりながら、では大学というのは将来どうあるべきなのか、どのような存在と考えるのか、当然ながら、専門知の方々も含めて、非常にもっと複雑な人たちがいるわけです。そういうものを前提としたときに、この実践型の教育というのをどのように大学の中で捉えているのかということをお聞きしたいと思います。

(有吉) 私が今所属している学部が都市科学部という、そもそも、都市に関わる全ての知力を結集して、都市の課題解決に取り組むというコンセプトの学部でございます。そこに大学が地域に関わるということの意味があると思っております、地域の課題で今解けずに

残っているものといいますのは、技術的には、もしかしたらこうやればいいというのはある程度分かっているのかもしれませんが、それを実際に組み合わせて、コスト的制約も満たしつつ、ちゃんと実装できる形で解くというのがなかなか出来ていません。そこで必要になりますのが、リソースを持っている方々を集めてファシリテートしながら、それを結集して、実際にコトに向かっていく能力を持った人材でして、その適任者と考えているのが大学の教員です。当該分野の専門性を持ち、かつファシリテートができて学生を巻き込み、彼らの力も使って地域との信頼を得ていく、そういうことによって大学が地域に対して具体的な貢献をしている存在だと認知をしてもらい、そこからの支援という形のフィードバックを受けるという意味では、やはり大学が地域から必要とされる状況をしっかりとつくっていくための取り組みを、大学の教育活動の一環として位置づけることが重要になるのではないかなと考えています。

(上山) そうしますと、大学の執行部の人たちの目から見たこういう大学での活動はどのように捉えられていると思われませんか。

(有吉) それは私の努力不足のところもありまして、大学全体でこういう活動をやっているというのは認知されていますが、部局をまたいだ活動といいますのは、どの部局の仕事でもないと言ってしまえばそうです。部局マターになっていないと、こういうことは大事で、大学としてやるのは良いことだという話はなりますが、ではそれが直接、担当教員が所属する学部のどのセクションに何をもちかしているかというところの説明がなかなかしづらい部分がございますので、総論としては応援するけれども、実際のメリットを感じていないという声を聞きますし、その辺りは肌で感じているところでもございます。

(菅) これ、モビリティ・デザインということで、割と「総合知的」な考え方というのが適用しやすいのかなと感じましたけれども、これに直接参加していらっしゃる学生さんたちは、「総合知」という考え方についてどのように捉えているかというのを、幾つかのExample でもいいので、御紹介いただけますでしょうか。学生さんたちがどう捉えているのかというのが非常に興味深いところだと思います。

(有吉) まず学生が、自分たちがやっていることが「総合知的」だということ、そういうことすら最初は気づいていなかったところが出発点でした。ただ、こういう外部に開かれた形で、様々なステークホルダーの方をお招きし、パネルディスカッションで自分たちが主役として登壇して議論をするという場を設けたことで、内閣府の方々にゲストとしてお越しいただき、「総合知」の御紹介をしていただくことにつながりました。その結果、

「あっ、自分たちがやっていたことというのは「総合知的」な発想というのが一部あったんだ」と気付くことができたのがまず大きいと思ひまして、その後は、そういう発想で、今後、自分たちがより「総合知」を意識しながら、誰と連携して何をやっていけばいいのか、どういう知識が必要で、何を学ばばいいか、というところの考え方がかなり変わっていったと思ひます。ですので、最初から「総合知」を意識していたというよりは、ある程度「総合知」という視点で自分たちを見つめ直すという機会をまずつくるのが大事かなと思ひています。

(菅) ありがとうございます。